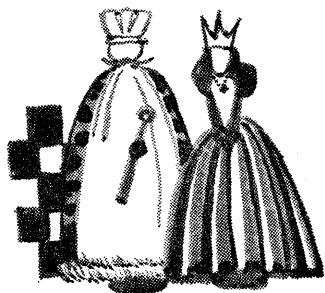


## エリクソンと幼児教育 (5)



仁科 弥生

### 三、移動と性器期(その二)

前回で述べたように、心理社会的発達の第三段階の課題は自発性の獲得である。しかし子どもに自発性が発達してくると、周りの人々と競争したり衝突したりすることが多くなり、それが子どもに罪悪感や不安を引き起こす原因となる。たとえば、子どもは、やましいことをして見つかったときに恥かしかるだけでなく、見つけられはしないかという恐れを抱くようになる。さらには単に想像しただけの考えや行為についてさえも罪の意識を感じるようになるのである。実はこれが個人的な意味での道徳性の礎石となるものである。また先にも触れたが、子どもは男女の性差についても強い好奇心を示すようになり、やがて身につけなければならない未来の役割について理解しはじめ。今回は、このような子どもの性役割意識の獲得や道徳性の発達の問題を中心に、エリクソンの考え方をたずねてみよう。

精神分析理論は、子どもがどちらかの性の親の方によりよく似た行動をとるようになる過程や、親のもつ価値観や道徳的規範が子どもに内在化される過程は、同性の親との強い同一化によると指摘している。この過程に関与する動機については、親の愛情が

失われることへの恐れと、攻撃者としての親に対する恐れとが仮定されている。ジェイユブソンによると、愛情喪失の恐怖は、子どもと親との最初期の依存関係に基づいており、子どもは親との肯定的な関係を持続させようとして親を模倣し、親と同じように振舞おうとするのである。こうして理想的自己像や道徳的規準の内容が子どものパーソナリティの中に組み込まれていく。同時に、親のパーソナリティの諸側面を自己概念の中に取り込むことによって子どもの親との結合感情が強まり、それが子どもに基本的な安全感を与えることになり、やがて逆説的ながら親から独立して、子どもは内在化された規準によって自分の行動を自分で統制することができるようになっていくのである。攻撃者との同一視はA・フロイトによって理論づけられているが、それによると、この動機は、両親に対してある程度の恐れを体験したときに喚起されるものであるという。危害から身を守るために、子どもは恐れている対象と同じような行動をするのである。この場合、子どもの性的、かつ攻撃的衝動と、これらの衝動を行動的にあらわしたときに両親が示す態度との間の葛藤がその底流にあることはいうまでもない。

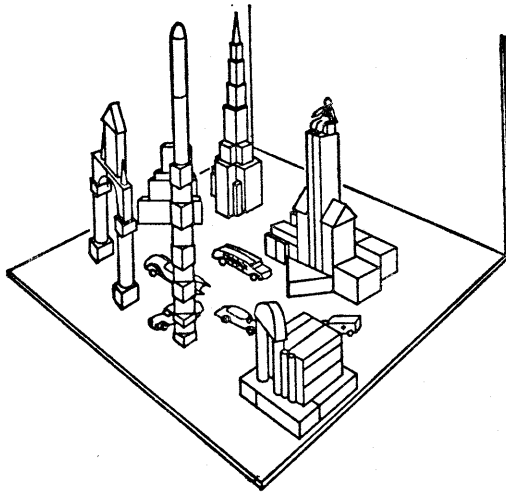
このように、道徳性の発達について、フロイトは、子どもの良心超自我が両親の超自我と同一化することによって形成され、そ

の良心が行動を動機づけたり、禁止したりする際に大きな役割を果たすことを仮定し、また幼児期という人生の初期に道徳性の発達の基盤があることを強調した点で貢獻が大きいとされている。しかし、フロイトが、子どもが包摂するのは親の超自我であると考えたことに対して、ニューマンらは、幼い子どもはその時の情緒状態に直接影響するような要素だけを受けとめる傾向があり、したがって親の道徳的価値が子どもの道徳的枠組の中にとり込まれる正確な過程については、フロイトの記述に疑問が残ると指摘している。ではエリクソンはどのような立場をとっているのだろうか。彼は『子どもが両親の超自我と同一化する』というエディプス段階に関しては、この両親の超自我がその時代の理想とできるだけ一致していることがきわめて重要であり、変化する文化的規範や制度を反映するのに両親が不適切であればあるほど、子どもの自我と超自我との葛藤は一層深刻なものになると述べている。そして道徳性を教えるメカニズムとしての親のしつけや児童訓練に注目し、道徳性の発達には両親を通しての働きかけによるが、社会そのものが及ぼす影響の大きい点をも強調して、その発達過程についての理論を展開させている。

次に、エリクソンのあげた例証を紹介しながら、その理論を考察してみよう。まず、男女の性役割意識の発達の問題から取りあ

げよう。エリクソンがカリフォルニア大学児童福祉研究所での正  
 常児を対象にした発達研究に参加して行なった遊びの場面にみら  
 れた子ども空間的行動に関する研究は有名である。それは十歳  
 から十二歳の正常な男女児童を一人ずつ部屋に招き、テールは  
 映画のスタジオで、玩具は俳優や舞台装置であると説明して、テ  
 ールの上に映画の面白い場面を構成してもらって、その結果を  
 考察したものである。一年半以上にわたって、約一五〇名の児童  
 が一人三回、約四五〇の場面を作った。それらの遊びの中に表現  
 された主題は、それぞれの子どもの生活史の力学と密接に関連し  
 ており、「独特の要素」と呼ばれるにふさわしいものであったと  
 いう。たとえば男子の中でただ一人、家具を円形に並べて部屋を  
 作った少年がいた。部屋の内部というのは実は女の子が好んで構  
 成した形態の一つであった。その少年は、当時、甲状腺の病気で、  
 肥って柔弱な体格をしていた。ところが一年後に、治療の効  
 果があらわれて痩せてくると、一番高く、一番細長い塔を作っ  
 たのであった。これは「独特」の要素の一例であるが、同時に、  
 それはその個人のもつ身体的な自己についての意識がこれら構造  
 物の空間的形態に影響を与えていることを暗示するものであっ  
 た。この結果から、エリクソンは、もし遊びに表現された形態に  
 男子に共通する形態と、女子に共通する形態とがあったとすれ

図 1



ば、それらは男性または女性であるという意識の片鱗を表現する  
 ものであると仮定することができると結論した。そして、事実、  
 構成された形態は勿論、使用された積木の数も男子と女子とでは  
 異なっていたのである。そこで、エリクソンはそれらを男女それ  
 ぞれの性に「共通」する要素と呼び、そして、これら形態を、た  
 とえば塔、建物、街路、凝った囲い、単純な囲い、壁のある室  
 内、壁のない室内などの用語で定義した。次にこれらの遊びの場

面の写真を二名の観察者（エリクソンの仮説については何も知らない）に示して、そのような形態の有無の判定についてまず彼らの一致度を調べた上で、彼らに男子の作品と女子の作品にこれらの形態があらわれた頻度を測定させたのである。それによると、男子は建物、橋、塔、街路などを作る傾向があり（図1参照）、一方、女子は実験用のテーブルを家の内部として使い、積木は単純な用途に用いるか、或は殆ど使わない傾向を示したという（図

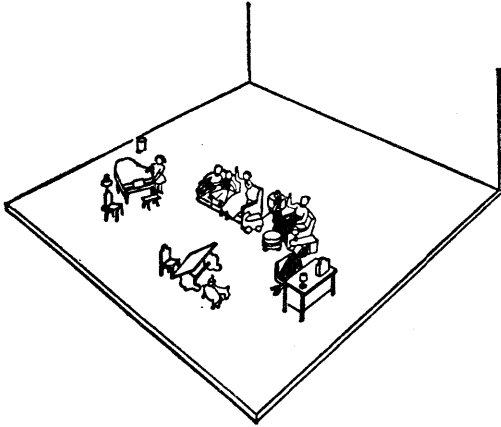


図 2

2参照)。したがって高い構築物が男子の形態に多かったことになる。しかしこの上昇傾向の反対、たとえば高い塔の倒壊、人形の墜落など下降傾向も同様に男子に典型的であった。これらはさまざまな形をとっていたが、すべて高低という変数が男らしさの変数であることを示していた。そして「高い」と「低い」が男性の変数であるとすれば、「開いた」と「閉じた」状態が女子に特有の形態であった。壁のない家の内部を大多数の女子が作った。そして多くの場合、その室内は平和そのものであった。しかし、いくつかの場面では、豚が闖入してきたり、虎が押入ってきたりなど、何か一騒動が持ち上がった。そして、このように脅かされるのはたいてい女性であるが、押入ってくるのは常に男性の人や動物であった。しかし不思議なことに人や動物が侵入してくるという着想は防衛のために壁を作るとか、入口を閉めるという行為には結びつかなかった。むしろこれらの侵入事件はユーモアと楽しい興奮を伴っていたという。これらの遊戯空間の利用に関するもっとも有意な性差をまとめると次のようになるという。男子の場合、著しい変数は、高さ、落下、激しい移動（自動車や動物やインディアンなどの列の）、または警官によるその流れの停止（図3参照）であった。女子の場合、それは静的な室内で、それらは単純な囲いで囲まれ、開放的であり、平穏であるか、或は外

图 3

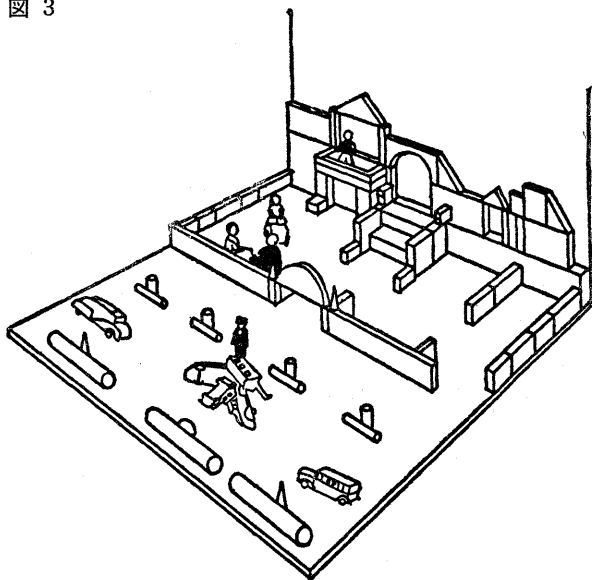
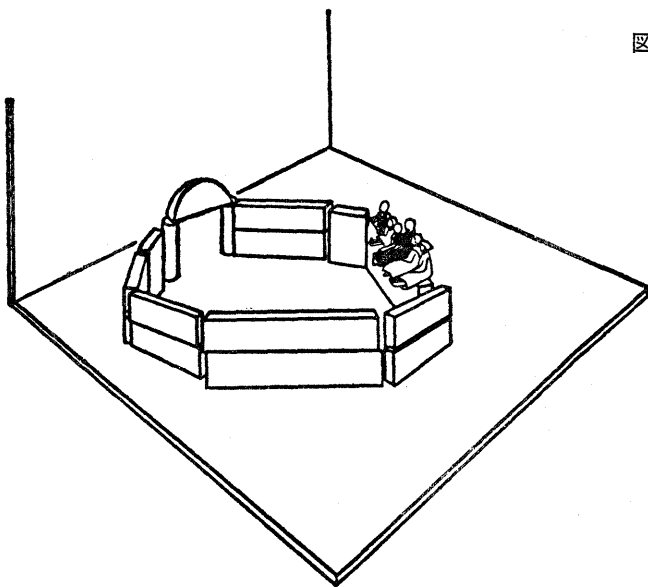


图 4



部からの侵入を受ける。男子は高い構築物に凝り、女子は門を飾りたてた（図4参照）。

これらの作品にみられる子どもたちの空間に対する感覚的傾向は、すでに触れたエリクソンが主張する器官様式をわれわれに思い出させるのである。ちなみに、この点について言及したエリクソンの言葉を引用しておこう。「それらが性的器官の形態にきわめて近似していることは、これまでにすでに明白である。すなわち、男性では、生殖器は外部的器官で、勃起性があり、侵入的である特性をもち、非常に動的な精子細胞をコントロールする。女性の場合は、それは内的器官で、静的に待機している卵子に通じる前庭的入口をもつ。」そして、彼は、臨床的判断として、性器様式が空間構成の形態を支配する様相は、男女には空間に対する感覚に深い相違があることを反映するものであると述べている。また、解剖学的構造と心理との間にみられるこの関係は、ちょうど男女の性的区別が人体の基礎計画にもっとも決定的な相違をもたららし、それが次に男女の生物学的経験や社会的役割をも決定するという関係と同じであると考えている。

エリクソンはさらに、これらの遊びの構造はさまざまな社会的含みの空間的表現であるとみなすこともできると分析している。すなわち、男子の外部や上方へ向う動きを表現する傾向は、自分

が強く、攻撃的になり、また社会に出て独立的な人間として活動し、「高い地位」に到達するということを示す一般的な義務感の表現であるかもしれないのである。女子の場合の室内の表現は、家庭を管理し、子どもを育てるという予期された仕事に専念していることを意味するともいえるのである。つまり、彼らは社会ごとに男女の性別に応じて期待されている役割を演じているだけかもしれないのである。したがって、それらは社会の性役割規範にそって両親が行なう意図的なしつけの結果であると解釈することもできるのである。

しかしながら、その解釈だけではまだ疑問が残るとエリクソンはいう。なぜなら、少年たちがこれらの場面を作りながら、主として自分たちの現在の、或は予期される未来の社会的性役割について考えていたとするならば、男の子の人形がもっとも頻繁に使われたはずであるが、実際には、もっとも好まれたのは警官の人形であったからである。しかも、この少年たちの中で、将来、警官になることを夢みている少年はごく少数であり、また彼らが警官になることを大人が期待していると思っている少年も少なかったであろうと想像できるのである。事実、この研究が始められたころに第二次世界大戦が勃発しており、飛行士になることが多くの少年のもっとも熱望な望みの一つであった。しかしこの遊びの

中では、飛行士は修道僧や赤坊よりは好まれたという程度であったという。ところが警官の人形は、このアメリカ西部の子どもの理想であったカウボーイの二倍の頻度で遊びにあらわれていたのである。また、女子にきわだって多かった室内の表現について、エリクソンは、それを、女子の主要な動機づけが現在の家族を愛することであり、未来の家庭を期待することであるために、彼女たちは男子と共有したかもしれないあらゆる望みを退けてしまった結果であると解釈したとしても、それでは、女子が家の回りに壁をあまり作らず、たとえ作ったとしても低い壁であったことの説明にはならないという。家庭生活に対する愛情からは、むしろ親密さや安全を保証するものとして高い壁や閉じられた入口が多いという結果が予想されるからである。そればかりではない。この平穩な家庭の情景の中で、女の子の人形の多くはピアノを弾いているか、或は居間で家族と一緒に平和に団欒していた。この場面が、面白い映画の場面を作るようにといわれて、彼女たちがしたいと望んだことを、或はしたいと装うべきだと考えたことを本当に表現していると、誰がみなすことができるだろうか。そこには性役割獲得の過程の複雑さや、強化による学習の効果についてのあいまいさなどが暗示されているが、同時に、子どもの性役割の形成は強化の働きだけによるのではないこと、つまり別の要因

によっても規定されていることが示唆されていると思うのである。これに関して、エリクソン自身は、女子の作品の中の平穩な室内の表現にとって、ピアノを弾く少女が特別な意味をもっていと解釈している。そして同じように、男子の作る大通りの場面にとって警官に停止させられた交通が特別な意味をもつと想定し、前者は内でのやさしさをあらわすと理解し、後者は外での慎重さをあらわすと理解している。そして『面白い映画の場面』を作るようにという明快な指示に答えて、このようにやさしさと慎重さが強調されていることは、単に文化的、意識的な理想に従っているという理論では説明できないきわめて動的な問題の広がりとして激しい葛藤がこれらの諸反応の中に表現されていることを暗示する」と述べている。これは、性役割の発達を親や文化からの他律的規定性のみならず、子どもの自我の自発的、能動的営みとしても進められる過程として見事にとらえたエリクソンならではの分析である。男の子と女の子は器官や能力や役割などの相違ばかりでなく、経験の独自性によっても区別されるのである。それは個人がもち、感じ、予期するすべてを自我が統合する結果である。ちなみに、エリクソンは自我を、人間の経験や活動を環境へ適応するための行動に統合していく積極的な能力としてとらえている。したがって、男女の性別を互いの違い方によって特色づけ

るだけではけっして十分ではないのである。そしてさらに彼は、文化は、われわれの生物学的に定められたものに磨きをかけ、男女間の機能の分割のために努力しているが、その分割は身体の解剖学的構造に対しても適切であると同時に、特定の社会にとっても有意義であり、かつ個人の自我にとっても統制が可能なものではなくてはならないとも主張している。

以上、エリクソンの子どもの遊びにみられた空間的行動に関する研究を紹介した。その構成された空間と表現された主題にみられた性差の分析は、生物学的要因、文化・社会的要因、心理学的要因の相互浸透の様相を明確にとらえていた。今日、学際的アプローチのむつかしさが取ざたされていることを思うとき、生物学的、社会的、心理学的アプローチが一人の研究者の業績の中にこのように見事に結実したことは瞠目に価するといえよう。だが何といたってこの研究の異色なのは、それら子どもの作品にみられた器官様式の証拠によって、われわれの行動が身体の基礎計画の中でしっかりと支えられているという事実を明らかにしている点であり、子どもの遊びの観察でその事実をこれほど鮮やかに示した研究は少ないのではなからうか。そこに、人間を常に身体的、社会的、心理的作用の中で生きる存在としてとらえる精神分析医としてのエリクソンの視点をわれわれははっきり読みとるこ

とができるのである。

(津田塾大学)

#### 参考文献

- 1 Erikson, E.H., *Childhood and Society*, 1963, 1st ed., 1950. (仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房一九七七)
- 2 Erikson, E.H., "Identity and the life Cycle: Selected Papers," *Psychol. Issues* (Monogr.), Vol. 1, No. 1, 1959. (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房一九七三)
- 3 Evans, R.I. 『エリクソンとの対話』陶堂、中國訳 北望社一九七一
- 4 Freud, A., *The Ego and Mechanisms of Defense*, 1936. (外林大作訳『自我と防衛』誠信書房)
- 5 Freud, S., "Three essays on the theory of sexuality," 1905. (懸田克躬訳「性に関する三つの論文」フロイド選集 5 性欲論 日本教文社)
- 6 Jacobson, E., *The Self and the Object World*. New York: International Universities Press, 1964
- 7 Newman, B.M., and Newman, P.R., 『生涯発達心理学』福富伊藤訳 川島書店一九八〇
- 8 高橋、小嶋、古沢編『家族の発達』同文書院一九七五